

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 22 日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520121

研究課題名（和文）中国第 6 世代映画・「新記録映画」に関する総合的研究

研究課題名（英文）A Synthetic Study on the sixth generation and 'New Documentary films' of Chinese Cinema

研究代表者

応 雄 (Xiong Ying)

北海道大学・大学院文学研究科・准教授

研究者番号：50322772

研究成果の概要（和文）：現代中国映画の第六世代と「新記録映画」について、資料収集をするとともに、その全体像をある程度把握することができた。また、外国映画との比較研究によって、その一部の作品における創造的な側面を検討した。さらには、これらの作品におけるドゥルーズの『シネマ』二巻との可能な関わりについて、理論的な考察を試みた。

研究成果の概要（英文）：This research focuses on China's "the Sixth Generation Cinema" and "New Documentary Films". We have partly gathered the works in DVD and grasped the situations concerning these cinemas to some extent. In addition, by comparing with some foreign cinemas we made analyses of the creative aspects in these films, and further, we made a close examination of how much it is possible that these films are linked with the discussions had by Gilles Deleuze in his cinema books.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2010 年度	700,000	210,000	910,000
2011 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	2,500,000	750,000	3,250,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：芸術学、芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：表象文化論

1. 研究開始当初の背景

中国映画の第 5 世代は保守化・「中流」化する傾向を見せるとともに、かつて彼らにあった創造的精神を失いつつある。それによってかわり、新しい形で映画の創造性を見せてくれたのは、1990 年代から頭角を現し始めた第 6 世代の作家たちである。王小帥、婁燁など、この世代の初期の代表的な監督もさることながら、特に 1990 年代半ばに映画活動を始めた賈樟柯は、とりわけその前期の作品群（『一瞬の夢』、『プラットホーム』、『青の

稲妻』）において、現代中国社会とそれを生きる中国の若者たちの生々しい実態を彼独特の映画手法で鮮烈に描き出している。一方、第 6 世代と時期をほぼ同じくして、90 年代初頭の呉文光から近年の段錦川、王兵、馮艷等まで含む野心的な作り手たちによる「新記録映画」も、大変動期にある中国社会が呈した諸々の現実的・精神的な側面を冷静にフィルムに収めようと、目覚しい活動をしてきた。

これらの作家作品群は、欧米・日本では、映画祭などで上映される傍ら、記事や紹介文、

初歩的な批評といったさまざまな形で触れられているが、まとまった論考や論集による全面的な研究は、まだなされていないといっている。中国国内では、幾多の批評や記事が新聞、雑誌に見られ、研究を兼ねた書物（呂新雨『記録中国 中国新記録片運動』、2003など）も出版されているが、それらの映画を、中国映画史の文脈に即して捉える、あるいは世界映画を視野に取り入れつつ考察する、さらにもしくは現代映画理論の諸問題と関わらせながら検討するといった、より踏み込んだ研究は、依然として欠如している。

当然なことに、あるものが研究されていないからといって、必ずしもその研究の価値が担保されるわけではない。しかしながら、「物質にせよ精神にせよ、実在は、われわれにとって、不断の生成としてあらわれる。実在は、できていくか、こわれていくかのいずれかである。けれども、実在は、決して、できあがった何ものかではない」（『創造的進化』第4章）というアンリ・ベルクソンの言葉を想起してみれば、「できあがった何ものか」を決して作ろうとしないのは、まさに第6世代と「新記録映画」に共通する根本的な姿勢であることがわかる。このことは、生＝持続＝時間＝生成がそれらの作家作品群に表現されているということをも意味する。そこから次の疑問が浮び上がる。果たしてこれらの表現は、欧米の作家または小津や溝口といった日本の作家と同じ仕方で提示されているのだろうか。

映画理論の分野では、ベルクソンの思想に大いに負っているジル・ドゥルーズの『シネマ1』と『シネマ2』は、20数年の歳月が経ったにもかかわらず、映画研究におけるその先端性を依然として失っていないと思われるが、この2冊の大著には、あまり気づかれていない事実がある。欧米映画を中心に展開した彼の論考は、アジアの映画を時にも取り上げるが、それらはほぼ日本の小津や溝口、黒澤など、つまり欧米ですでに評価されている作家に限られるものである。別のいい方をすれば、中国の映画作品や監督は一度もこの里程標的な大著に浮上していない、ということである。当然ながら、『シネマ』の上梓とほぼ同時期に製作された第五世代の初期作品『黄色い大地』などを、ドゥルーズは知る由もなかったのかもしれない。しかし我々が関心をそそられるのは、仮にドゥルーズがジャン・ルノワールの『ピクニック』を想起させもする1948年の『小城之春』や、第五世代の初期作品を、あるいは第6世代と「新記録映画」の作品を観ていたら、彼はいかに言及していただろうか、ということである。この架空の問いを敢えて発してみたいのは、実はより学術的に生産的な次なる問いを引き出すためである。即ち、（とりあえず他の作

家作品を捨象するが）創造性に満ちた第6世代と「新記録映画」は、『シネマ』で提起された諸問題、とりわけ持続とその諸切片についての思考と、また、知覚・記憶、現在・過去の問題にじかに関係する結晶イメージについての論考と、さらには生成変化する未来の次元についての指摘と、いかに関わりうるか、ということである。

このことは、少なくとも以下の二つの問いによって展開されうる。まずは、現代中国映画においては、持続は具体的にどのような方法で提示されているのか（欧米や日本の作家たちと異なる点など）、という問いである。本研究は、これを主に第6世代に関わる事柄として考察する。

次の問いは、主に「新記録映画」の領域で検討されることになる。どこまで「記録」であり、どこから「嘘」をりはじめたか、そうした問題はつねにドキュメンタリー映画につきまとうが、「新記録映画」が示す、持続／記憶、真／偽にじかに関わる諸様相は、（ドキュメンタリーというジャンルの問題も絡んでくるが）『シネマ』で提起された問題群／内包される問題点についての検討へと、いかに導かれうるか。「新記録映画」についての考察が『シネマ』の思想をさらに発展させる契機になるとまでは、いわないでおくことにするが、ささやかな進展や僅かながらの突破口となることは、果たして望み得ないのだろうか。

応募者は、これまで、欧米映画理論を援用し反省しつつ、作家映画、メロドラマ、カンフー映画等諸ジャンルにわたって、1930年代から現在までの中国映画に関する幅広い研究を行ってきた。近年では、『シネマ』を中心とする現代映像論の研究を行っているが、その諸思考を中国映画の分野において検証すべく、とりわけ現代中国映画に出現した創造的な作家作品の研究に関連させ、創造的な研究を試みようとする着想に至った次第である。

2. 研究の目的

本研究は、賈樟柯を代表とする中国の第6世代映画と、「新記録映画」とも呼ばれる現代中国ドキュメンタリーを対象に、その歴史的展開と美学的な諸相を整理・考察し、中国映画史におけるその位置づけ、及び現代映画理論における諸問題との可能な関わりを明らかにしようとするものである。研究期間中は、次の三つの課題を究明することを目的とする。

a. 第6世代と「新記録映画」を、歴史的展開の文脈、作家作品群の分布分類、映画美学的特徴等において整理し、資料調査・分析のうえでその全体像を描き出す。

b. 中国映画史におけるその位置づけを明ら

かにし、欧米や日本など諸国の映画を比較しながら、その映画表現や美学の独特な点を究明する。

c.映画理論、とりわけ『シネマ1』『シネマ2』で提示された諸思考との可能な関わりについて検討する。ドゥルーズの映画思考を彼が一度も言及していない中国の映画において検証するとともに、その思考をさらに発展させる可能性、あるいは、さらに豊富なるものへと展開される可能性を、現代中国映画の実践に見出すことができないかを試みる。

3. 研究の方法

原則として、本研究はフィールド・ワークを含む資料調査、データ収集と整理、データ・ベースの作成、研究集会の開催、論文執筆、研究成果のまとめといった、基礎資料の調査から理論的な論考までの諸段階の作業によって、本課題を総合的に研究するものである。基本的には応募者の個人研究になるが、必要に応じて海外共同研究者や博士課程大学院生に研究の連携と協力を要請した。

【平成 21 年度】

初年度では、本課題の研究を下記の三つのユニットに分け、全面的に推進した。

【ユニット1、第6世代・「新記録映画」に関する基礎資料の調査】

周知のように、これら二つの映画群は、国の検閲を経て正式に公開されたものを除けば、海外の映画祭で上映されるのみ、あるいは国内の大学の映画グループで上映され、アンダーグラウンドで流通するのみといった類の作品を数多く含んでいる。既存の映画製作・配給システムの外部にあるそうした状態は、映画の独立性や創造性が保たれる前提ともなっているが、一方で研究を実行する場合には、資料収集の面においてはたいへん困難な状況に直面せざるを得ない。

そこで、個人的なつながりを含むネットワークを活かし、まずはアンダーグラウンドで流通する作品のDVDないしフィルムの収集を行う（一部の作品DVDをすでに入手済み）。それと同時に、第6世代・「新記録映画」の作家らに取材し、一次的な資料をできるだけ収集した。

この資料調査を実施するに際して、若手の映画製作者と多くの人脈を持ち、それらの映画に関する研究に携わってきた中国の研究者や、中国インディペンデント映画の拠点である北京宋荘で映画活動をし続けているドキュメンタリー作家などに研究協力を要請した。また、そうした研究調査で予想される業務の量を考慮して、博士課程の大学院生に資料調査・整理の協力を依頼した。

【ユニット2、中国映画史との関連/欧米や日本の映画作家・作品との関連に関する考

察】

第6世代・「新記録映画」は、時空的に孤立したものではない。中国映画史の文脈においてこれら二つの映画群をどう捉えればよいか、革命前の上海映画や、1963年前後に出現した新しい映画表現への模索の動き、第五世代の作品などさまざまな映画事象との関係性について考察を試みた。

また、第6世代・「新記録映画」の映画表現・美学上の諸特徴を明らかにするために、外国の映画との比較研究も必要であると考ええる。ネオ・リアリズム、ヌーヴェル・ヴァーグ及びその線上にある作家たち、またロバート・フラハティ以来のドキュメンタリー映画の文脈、日本の作家たち及び「新記録映画」に大きな影響を与えた小川紳介など、これらの作家作品との表現・観念上の関連と差異を検討する。このユニットの研究によって、第6世代・「新記録映画」におけるオリジナリティの真の在り処を明らかにしようと努めた。

【ユニット3、ドゥルーズ『シネマ』を中心とする現代映画理論に関する研究】

ドゥルーズの『シネマ』は、現代思想、映画理論の諸分野にわたる高度的な理論書であるとともに、数多くの作家作品を取り扱う映画の「博物学」でもある。この大著を詳細に研究することは、それ自体、非常に学術的価値を有する。このユニットでは、『シネマ』に援用・言及された諸分野の言説や事象をできるかぎり徹底的に調査し、『シネマ』の理論構造を究明しようとした。ここでは、ドゥルーズ全体の仕事、現代思想の諸言説、古典と現代の映画理論、世界各国の作家作品など、多分野にわたる諸事項について、研究を進めた。

このユニットでは、かかる学術分野の原典の精読（西洋言語による原著の精読も含む）と検討が主たる作業となった。

【平成 22 年度】

初年度の研究成果を踏まえながら、前に示した各ユニットの研究のさらなる推進を図る。本年度では、第一ユニットの調査を推進し、調査から得た膨大な資料を初歩的に分類整理した。

それとともに、本年度では、第二と第三のユニットの研究をさらに推進した。具体的には、中国映画史の文脈における第6世代・「新記録映画」の意義を明らかにする。また、欧米や日本の映画作家作品との比較研究を通して、第6世代・「新記録映画」の持つ美学や表現上の特徴を究明する。さらには、『シネマ』の理論的な構造及び多岐にわたるその諸思考を究明するとともに、第6世代・「新記録映画」との理論上の可能な接点を探索する。したがって、それらの研究を遂行するた

めの研究調査を継続し、また、それらの研究からえた初歩的研究成果を予定される研究発表の内容に仕上げ、研究論文や出版物にまとめた。

【平成 23 年度】

最終年度の前期の 6 ヶ月は、すでに推進してきた研究を整理し、それぞれのユニットで得た研究成果を統合し、新しい学術的発見へと導こうと努めた。それと同時に、研究調査で集めた第 6 世代・「新記録映画」に関する資料を整理した。年度の間頃、海外の研究者や現代中国映画の製作者（監督）も含め、応募者と各研究協力者を中心とする研究集会を開催する準備をした。

後期の 6 ヶ月は、多くの成果をまとめる総合的な研究の段階に至り、日本や中国での成果公開に至るべく努力した。したがって、研究集会の開催と成果のまとめ、報告の最終的な検討と点検、報告書の作成などが、この段階においては本研究実施の主要な活動となった。

4. 研究成果

初年度と二年目に、すでに数点の研究成果を上げたが、最終年度では、それまでの 2 年間の研究成果を踏まえ、研究論文を執筆し、研究発表を行い、国際シンポジウムを開催するかたちで、多くの研究実績を集中的に上げることができた。

(1) 研究論文の執筆と発表

最終年度の研究成果を総合的に上げるべく、研究論文を 3 点執筆した。これらの成果は、現代中国映画作品についての検討や中国映画史に関連する作品考察、外国映画との比較参照など、本研究に関する広範にわたる論考となっている。

(2) 研究発表

また、学会発表欄で挙げた通り、日本と中国の大学で日本語・英語・中国語による研究発表を 4 点行った。そのうち招待講演 3 点を含むこれらの研究発表は、とりわけ第六世代・「新記録映画」に緊密に関わる、中国映画における速度および生成変化についての考察や、『シネマ』の映画思想についての検討、現代中国インディペンデント系の映画における潜在性の問題に関連する外国映画作品についての比較研究など、本研究に関して多視点による総合的な考察を行うことができた。

(3) シンポジウムの開催

研究最終年度の締めくくりとして、「現代中国映画を討議する！—第六世代・ドキュメンタリー映画」と題する国際シンポジウムを開催した（平成 24 年 1 月 16 日、北海道大学）。中国映画人協会機関誌『電影芸術』編集長呉冠平、現代中国ドキュメンタリー映画

作家王我、上海大学映画芸術技術学院教授石川を招へいし、日本学術振興会特別研究員川崎公平、北海道大学大学院文学研究科博士課程劉洋にも加わってもらい、合わせて 5 つの講演・研究発表を行った。第六世代映画と「新記録映画」について集中的に討議するこのシンポジウムの開催によって、本研究対象に対する多角度の検討と議論ができ、豊富な研究成果を上げることができた。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 6 件）

- ① 応雄、屬於別一個世界的優美、清廉和正義—讓・維果電影和水、音樂與表演、2012 年第 4 号、印刷中
- ② 応雄、動物への生成変化、およびその速度—田壮壯の『狼災記』(2009) について、層—映像と表現、第 5 号、2012 年、70-79
- ③ 応雄、水の映画—ジャン・ヴィゴ、ジャン・ルノワール、費穆（下）、層—映像と表現、第 4 号、2011 年、45-67
- ④ 応雄、德勒茲《電影 2》読解：時間影像與結晶、電影藝術、査読有、2010 年第 6 号、96-104
- ⑤ 応雄、水の映画—ジャン・ヴィゴ、ジャン・ルノワール、費穆（上）、層—映像と表現、第 3 号、2009 年、122-136
- ⑥ 応雄、德勒茲《電影 1》中的“運動影像”、電影藝術、査読有、2009 年第 4 号、112-118

〔学会発表〕（計 4 件）

- ① 応雄、讓・維果、讓・雷諾阿電影中的水、上海大学影視藝術與技術学院（招待講演）、2011/12/15、上海大学、上海（中国）
- ② 応雄、物質世界的美麗與正義：運動影像、南京大学文学院（招待講演）、2011/12/14、南京大学、南京（中国）
- ③ 応雄(Xiong Ying)、"The Becoming-Animal and Speed: Tian Zhuangzhuang's The Warrior and the Wolf"、International Symposium "Traversing Cultural and Media Boundaries"（名古屋大学と上海交通大学共催）、2011/12/11、上海マート 4A 会議室（中国）
- ④ 応雄、中国映画における速度、「中華圏のモダニズム」シンポジウム（招待講演）、2011/12/3、富山大学、富山市

〔図書〕（計 2 件）

- ① 応雄（編著）、大修館書店、中国映画のみかた、2010 年、310
- ② 銭態、応雄、中国電影出版社、中日影像文化的地平線、2009 年、225

6. 研究組織

(1) 研究代表者

応 雄 (Xiong Ying)
北海道大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：50322772

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし